

また、働く母親については大半が午後7時までに帰宅しているが、2001年と比べるとその割合がやや低下し、午後7時以降8時までに帰宅する割合が高まっている。

塾や習い事通いで忙しい子どもたち

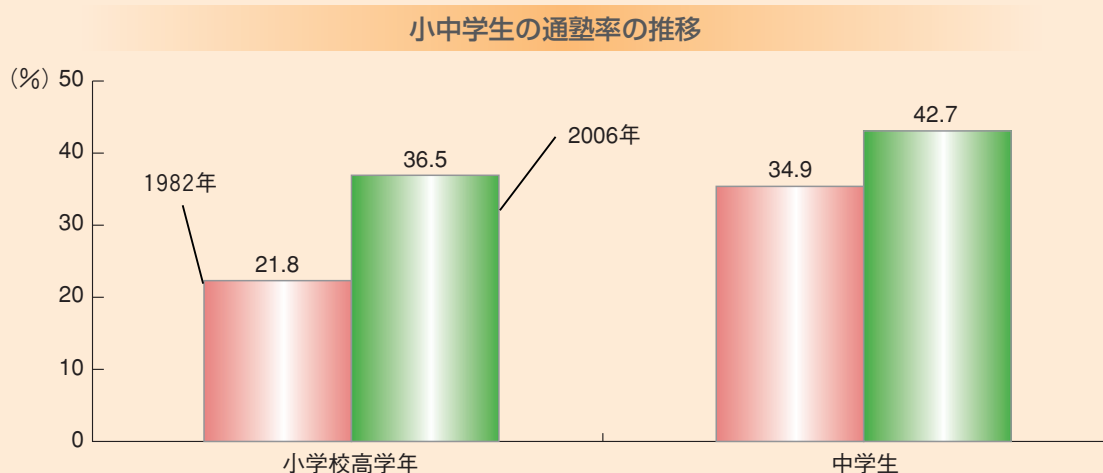
家族が一緒に家にいることを阻む要因を主に大人の側から見てきたが、では子どもについてはどうだろうか。先に紹介した調査では、子どもが家族との時間が取れない理由として、「塾や習い事で忙しい」との回答も挙げられたが、その現状について見てみよう。

2006年において子どもが塾に通う割合は、小学5年生で36.5%、中学2年生で42.7%である（第1-1-18図）。また、別の調査ではあるが、82年では小学4～6年生で21.8%、中学生では34.9%となっている。調査対象者の抽出方法などが異なるため、これらの調査の結果を単純に比較することはできないが、この20年余りで塾に通う子どもの割合が高まっているとの傾向を読み取ることはできよう。特に、大都市（東京23区内）について見ると、2006年において学習塾に通う小学5年生は51.6%（「進学塾」30.5%、「補習塾」14.1%、「その他」5.6%）に達しており²、大都市を中心に子どもの塾通いが過熱している状況を見て取ることができる。

次に、塾や習い事に通う子どもが何時に帰宅するかを尋ねたところ、午後7時までに帰宅するという回答が44.4%と多数を占めているものの、午後9時以降の帰宅も27.6%と、3割弱の子どもが夜遅くまで塾や習い事をしており、塾や習い事に通うことによって帰宅時間が遅くなり、家にいる時間が短い子どもが少なくないことがうかがえる（第1-1-19図）。

そして、この結果からは、仕事で忙しい大人のみならず、子どもについても放課後に塾や習い事に通う人が増えていることが、家族が一緒に家にいることを阻む要因になっているとすることができよう。

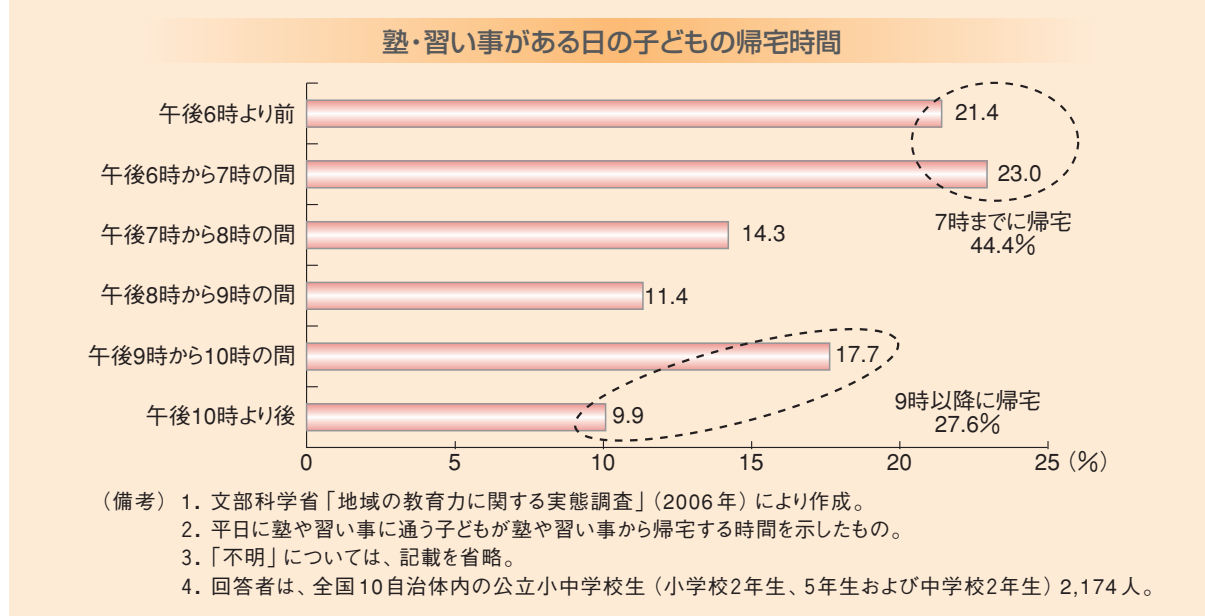
第1-1-18図 子どもの通塾率は上昇している



（備考）1. 厚生労働省「児童環境調査」（1982年）、株式会社ベネッセコーポレーション「第4回学習基本調査」（2006年）により作成。
2. 学習塾へ通う割合。
3. 回答者は、1982年は小学4～6年生1,402人、中学生1,583人、2006年は小学5年生2,726人、中学2年生2,371人。

2 株式会社ベネッセコーポレーション「第4回学習基本調査」（2006年）による。「進学塾」、「補習塾」、「その他」の数値は、回答者数を母数として算出したもの。

第1-19図 塾・習い事からの帰宅時間は3割弱が午後9時以降



イ) 背景その2～家においても家族と過ごすことを阻む要因

若者は家においても家族と過ごさず一人で行動する割合が高い

ア) では、家族が家に一緒にいる時間が短くなっているため、家族と触れ合う機会が減少していることを見てきた。しかしながら、家にいる時間が十分に長くても、必ずしもつながりを持つとは限らない。なぜなら、家にいたとしても家族と別行動を取っている場合、家族とのつながりを持っているとは言い難いからである。そこで、家族のつながりを弱めている可能性があるもう一つの要因として、家においても家族と過ごすことを阻む要因について見ていくこととする。

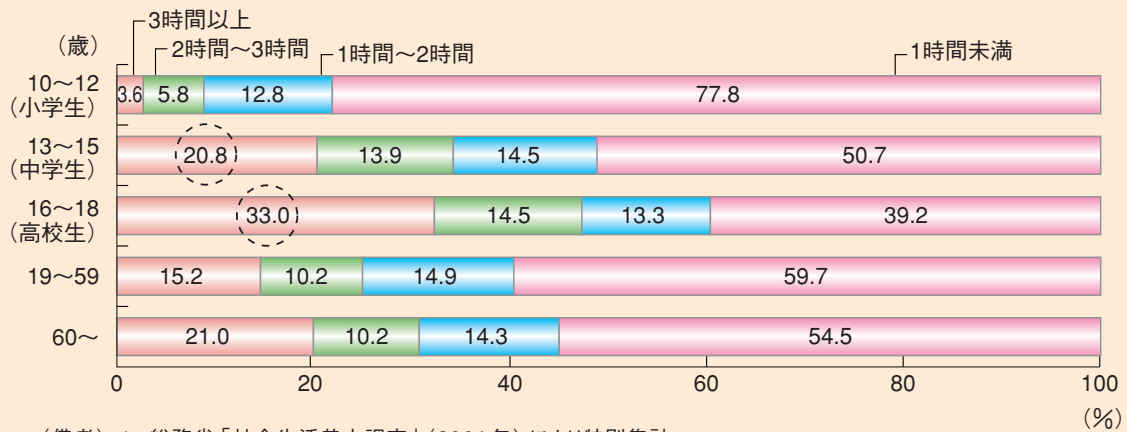
平日の夜帰宅してから就寝までの時間を、家族と過ごさず一人で過ごしている人はどのくらいいるのだろうか。家においても家族と過ごさない層を把握するために、ここでは社会生活基本調査から、「休養・くつろぎ」、「趣味・娯楽」など平日夜に主として家の中で行うと思われる行動³を選定し、午後6時から午前0時までの間にそれらの行動を「一人で」行った割合を見ることとした(第1-1-20図)。年齢層別に見てみると、10代および60代以上において、一人で過ごす時間が長くなっている。特に高校生(16～18歳)は、一人で3時間以上過ごす人の割合が3割を超えており、家族と別行動を取っている傾向が顕著に現れている。また、一人で3時間以上過ごす小学生(10～12歳)は3%強であるが、中学生(13～15歳)になると20.8%と急に高くなり、子どもが成長するにつれて親と独立して行動する状況がうかがえる。

一方大人(19～59歳)では、一人で3時間以上過ごす人の割合は15.2%と中高生に比べて低い。また60代以上では、一人で3時間以上過ごす人の割合が21.0%と高くなっているが、これは配偶者との死別などにより家族と過ごす時間が減少するためと考えられる。

以上の結果から、家においても家族とではなく一人で過ごしがちな層として注目すべきは、主に中高生といった若者であることが分かった。そこで以下では、若者が家においてもなぜ家族と一緒に過ごさないのか、その要因について見ていこう。

3 生活行動のうち「身の回りの世話」、「食事」、「学業」、「家事」、「介護・看護」、「育児」、「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」、「休養・くつろぎ」、「学習・研究」、「趣味・娯楽」、「受診・療養」、「その他」を主に家庭内で行う行動とみなした。

年齢層別平日夜に家で一人で過ごす人の割合



(備考) 1. 総務省「社会生活基本調査」(2001年)により特別集計。

2. 平日午後6時～午前0時までの時間帯を対象として、「身の回りの世話」、「食事」、「学業」、「家事」、「介護・看護」、「育児」、「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」、「休養・くつろぎ」、「学習・研究」、「趣味・娯楽」、「受診・療養」、「その他」の行動を一人で行った時間帯の割合を示したもの。

3. 四捨五入の関係で、内訳の合計は100%にならない。

4. 対象は、10歳以上の男女。

家にいながら若者は一人で勉強をしたりテレビを見たりしている

家にいながら家族と一緒に過ごさない若者が多いことを見たが、このような若者は一人で何をしているのだろうか。10歳から18歳までの男女のうち、平日午後6時から午前0時までに一人でいる時間が3時間以上の者について、一人でいた時間を行動別に分解して見た(第1-1-21図)。その結果、「学業・学習・研究」に費やす時間が全体の40.8%と最も長く、「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」(20.9%)、「休養・くつろぎ」(13.9%)、「娯楽・趣味」(9.5%)がそれに続いている。つまり若者は一人で、勉強をする、テレビを見る、趣味や娯楽をするなどしながら過ごしていると言える。このうち、勉強や新聞・雑誌を読む以外の行動については、家族と一緒に行動することが可能と思われるものもあるが、若者の場合は一人で行動することが多いことが推察される。

若者はインターネットの利用時間が長い

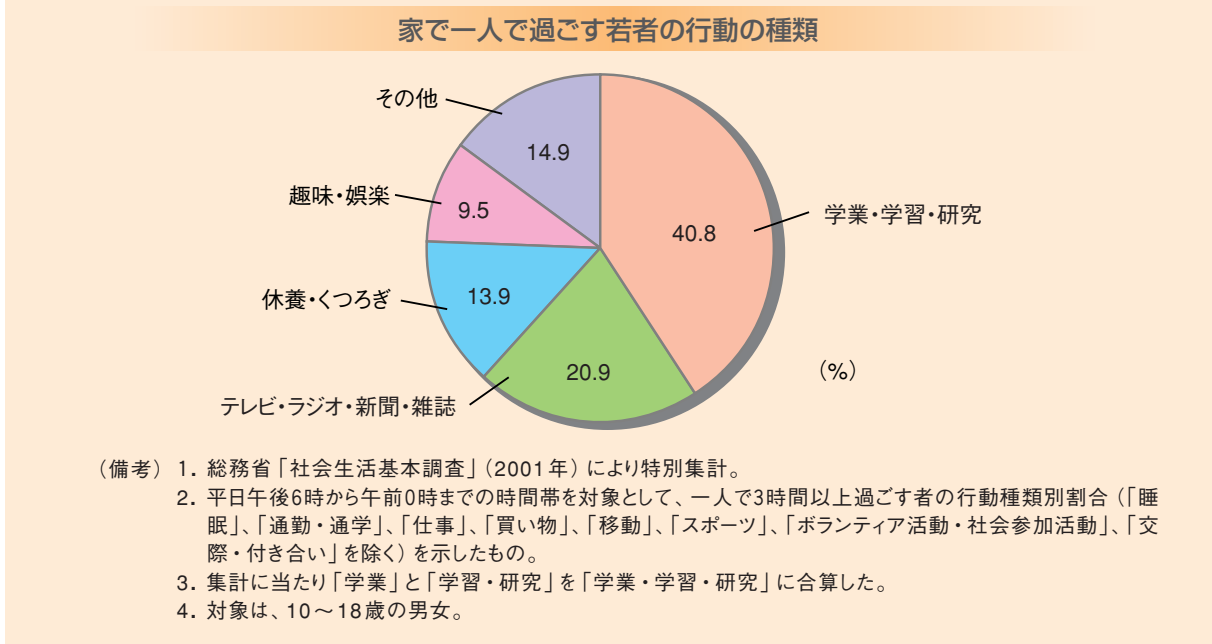
若者は家においても家族と一緒に行動しない傾向にあることを見たが、これはどのような理由によるものだろうか。ここでは、従来から存在するテレビに加え、近年目覚ましく普及しているIT(情報通信技術)関連機器に着目して、その利用状況や家族のつながりに与える影響を見ていこう。

まず、テレビやIT関連機器が現在どのくらい普及しているか見てみよう。テレビの世帯普及率は、80年にはほぼ100%に達している(第1-1-22図)。また、百世帯当たりの保有台数は2005年には252.0台⁴に達しており、世帯平均の人数が2.55人⁵であることを勘案すると、一人一台の保有に近い状況となっていると言えよう。若者が一人で過ごす主な行動の一つがテレビ視聴であることを見たが、このように世帯で一台ではなく一人一台にまでテレビが普及したことが、その背景にあると考えられる。

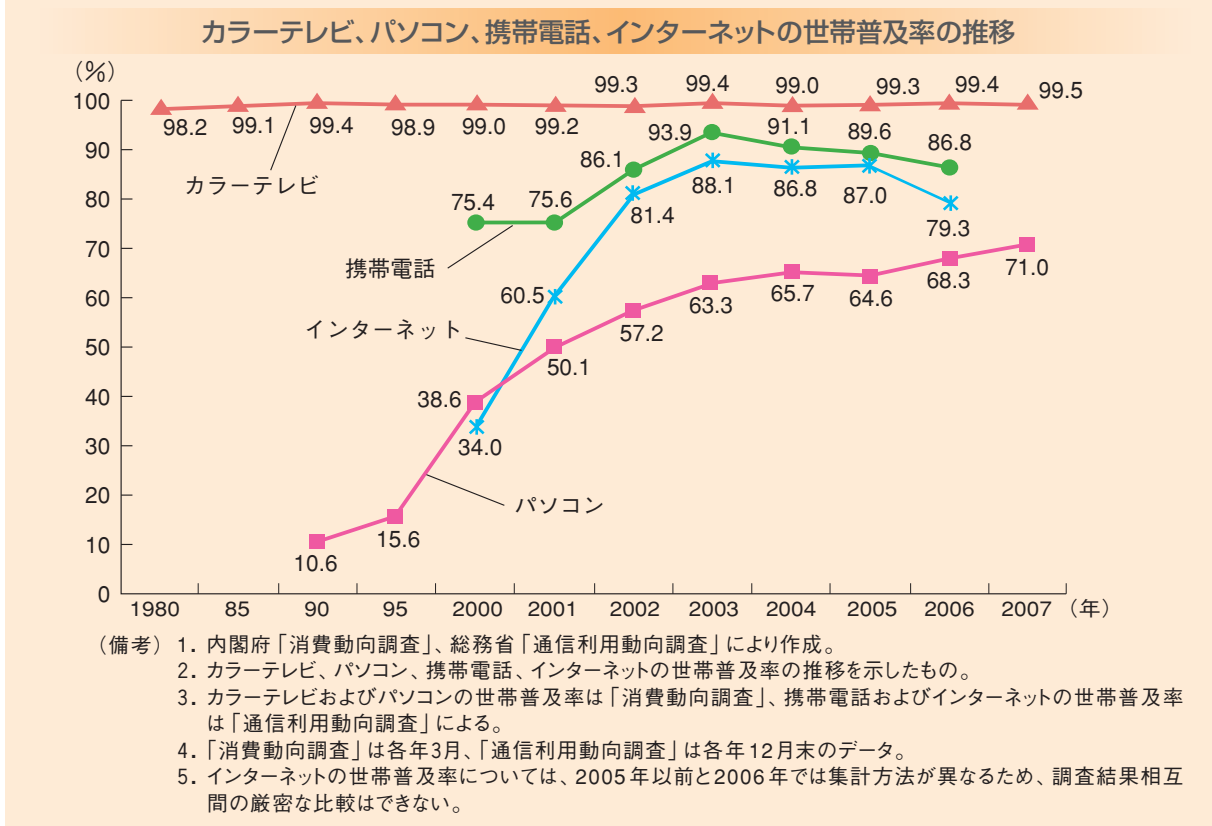
4 内閣府「消費動向調査」(2005年)による。

5 総務省「国勢調査」(2005年)による。

第1-1-21図 家で一人で過ごす若者の行動の種類は、学業、テレビ、休養などが多い



第1-1-22図 IT関連機器等の普及率の推移



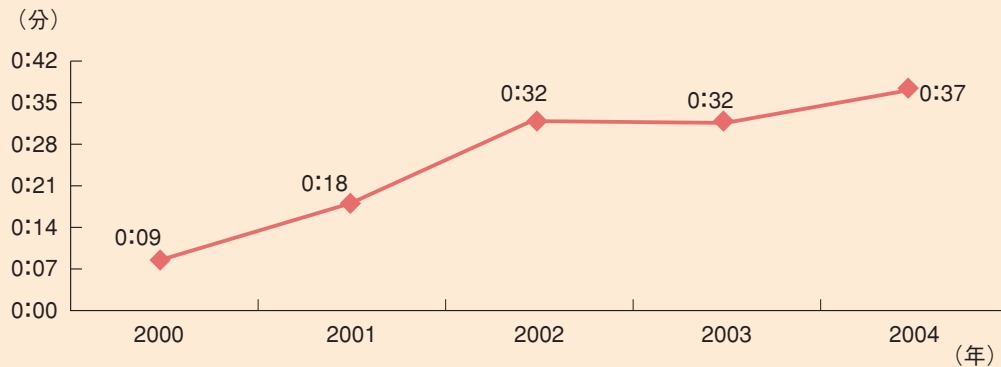
また、IT関連機器は既に大半の世帯に普及し、携帯電話は2006年で86.8%、パソコンは2007年で71.0%の世帯が保有している。インターネットは世帯普及率が2000年の34.0%から2006年の79.3%まで伸長し、利用人口も総人口の約7割弱に相当する約8,700万人⁶に達している。

6 総務省「通信利用動向調査」(2006年)による。

インターネットの普及と共に利用時間も長くなっている（第1-1-23図）。1日当たりのインターネットの平均利用時間は2004年で37分とそれほど長くはない。しかし、これをインターネット利用者の平均利用時間でみると、約1時間16分となっている（第1-1-24図）。また、年齢層別では若い人ほど、より長い時間インターネットを利用しており、13～19歳では約1時間48分と平均を大きく上回っている。

第1-1-23図 伸び続けるインターネットの利用時間

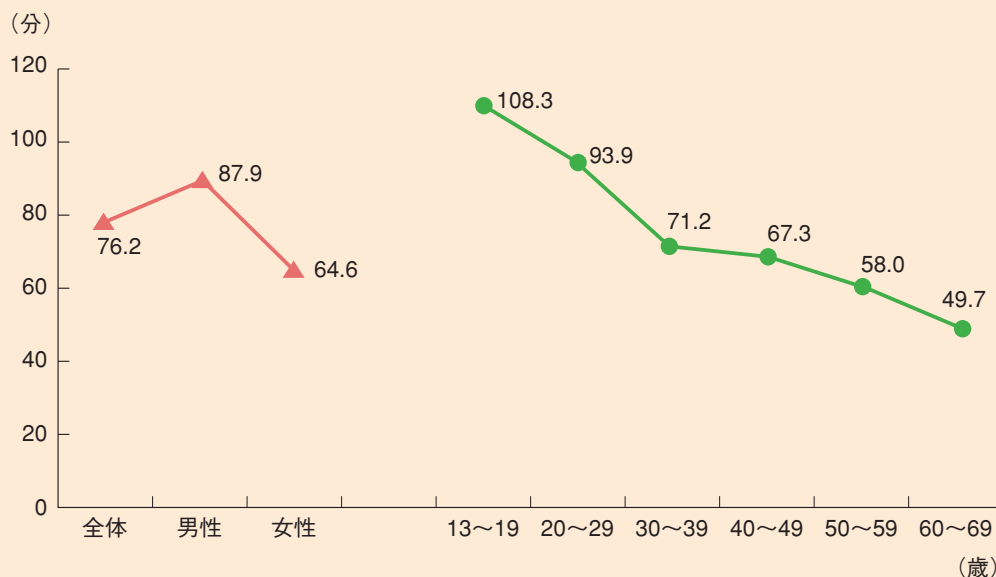
1日当たり平均インターネット利用時間の推移（全体平均）



- (備考) 1. 総務省「情報通信白書」により作成。
 2. パソコン、携帯電話・PHSによるインターネット利用時間の合計。
 3. 対象は、2000～2003年は12歳以上、2004年は13歳以上70歳未満の男女。

第1-1-24図 10代、20代でインターネット利用時間が長い

男女別年齢層別1日当たり平均インターネット利用時間（利用者平均）

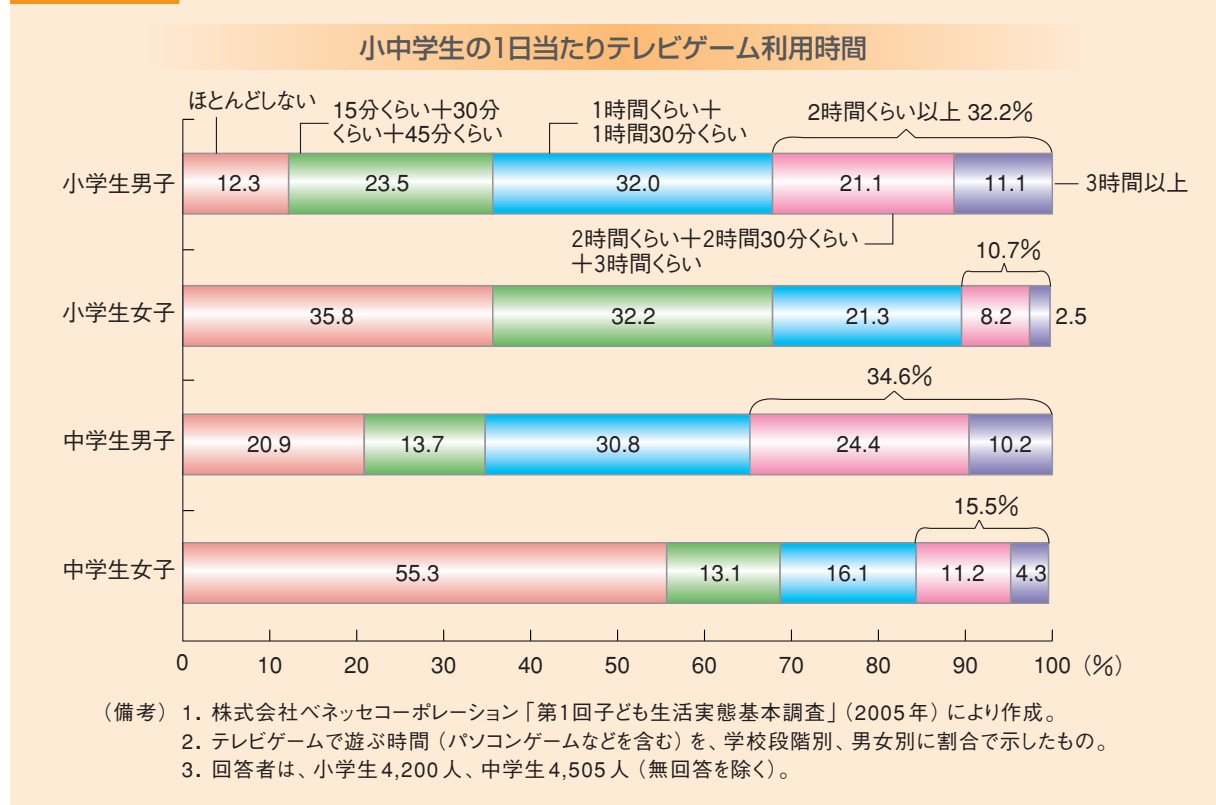


- (備考) 1. 総務省「情報通信白書」(2005年版)により作成。
 2. パソコン、携帯電話・PHSを合計した1日当たりのインターネットの利用者平均時間を、男女別、年齢層別に示したもの。
 3. 対象は、13歳以上70歳未満の男女。

子どもがテレビゲームに費やす時間は長い

また、テレビやインターネットのほかに、近年の子どもの家での過ごし方として特徴的なものにテレビゲームが挙げられよう。テレビゲームは普及した当初に比べ、年々技術の高度化が進み、ゲームの内容も面白いものとなってきていることから、子どもがテレビゲームに費やす時間も増えている可能性がある。そこで、1日当たりのテレビゲーム利用時間を見ると、小学生平均で1時間03分、中学生平均で1時間といずれも1時間以上⁷となっている。特に、小学生男子と中学生男子では、それぞれ3割以上が、1日当たり2時間くらい以上テレビゲームを行っている（第1-1-25図）。

第1-1-25図 小中学生男子の3割以上が1日2時間くらい以上テレビゲームをしている



このようにIT関連機器やテレビゲームの普及は、家庭内で若者が一人で過ごす時間を増加させ、家族の行動の個別化を促進している可能性があるとも言えるだろう。

(2) 離れて暮らす家族の増加

これまで、同居している家族が一緒に家で過ごす時間が少ないこと、家にも家族と過ごさないことなどにより、家族の行動が個別化し、その結果家族のつながりが弱まっていることを見てきた。

では、同居していない家族、すなわち別居している家族においては、つながりに変化が見られるのだろうか。別居家族は同居家族と比べて、離れて暮らしていることにより、一般的に交流を持ちにくいと考えられ、つながりが弱いことが想定される。そこで、以下では、別居している家族に焦点を当てて、どのようなつながりがあるのか、また、つながりに変化が見られるのかについて検証していきたい。

7 株式会社ベネッセコーポレーション「第1回子ども生活実態基本調査」(2005年)による。